
女神と騎士とカレーな世界

のの丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と騎士とカレーな世界

【Nコード】

N1164V

【作者名】

のの丸

【あらすじ】

王道である異世界召喚をされた。魔法あり、精霊ありの世界で女神と称えられ、要求された事はただ1つ。

「カレーを作り、我が国をお救いください！」
そんなバカな。

女神と呼ばれた日

「ふん、ふふん、ふうん」

鼻歌を歌いながら鍋の中身を掻き回す。ちょっと配分間違えたけど、まあ一人で食べきれなかったら明日にでも回そう。寝かせても旨味は増すからね。

「うし、後は煮込むだけだね」

まだ少し固い野菜をつつきつつ鍋に蓋をした。それまでにさっさと洗い物を済ませてしまおう。

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、肉、ルー。この全てが混ざれば言わずと知れたカレーの出来上がり。

材料さえあればお手軽に出来る大鍋料理は主婦の味方。いや、私結婚してないけど。

特に料理が得意でもない私でも出来る料理の一つ。大学のレポート

が滞り最近まともな食事をとってない。作ってくれる両親も田舎に置いてきた…もとい上京した私には自炊という選択しかなかったのである。

まあ今の時代コンビニという利点はあるから困りはしないけど…あ、レポートも終わったし食べ終わったら久々にネサフしよう。お気に入りのサイトさんも更新してるかもしれない。

ウキウキと洗い終わった食器を伏せておくとカレーのルーのパックを手を取った。

そして充分に煮込んだであろうカレー鍋の蓋を開けると中から湯気が…。

出てこなくて瞬間、私は別世界にいた。

「……は？」

あまりの事に間拔けな声が口から出た。

鍋の蓋、カレーのパックを持ったままの体勢で。

目の前に広がる光景。それは独り暮らしの狭いキッチンなどではなく……ほら、あれだ。よくあるファンタジー展開で、勇者とかに膝まずいてるやつ。

私の部屋が何個入るのってくらいの空間で、まるで協会のような神聖な室内。それでいてゴージャスな赤い絨毯の上に騎士のような格好や昔の貴族が着てそうな服を着込んだ人達がへへーっとな膝まずいているのだ。

え、えーと？どんな展開だ？レポート疲れで立ったまま寝たのか私。

「ようこそ、お越しくださいました。女神よ」

「…へ？」

女神って、誰。

一番手前にいた男が顔を上げる。どうやら今喋ったのもこの男らしい。響く、凜とした声にも好感を持ったが容姿も良かった。

黒髪にひと束だけメッシュのように青の入った、いかにも真面目そうな顔立ちの整った男。目はメッシュの色と同じ青。着ているものは、清楚な白い鎧だ。

コスプレ…というには馴染みすぎてるけど…。

「我が国、レナーガルをどうかそのお力を貸し、危機からお救いください」

真っ直ぐ私を見る目は真面目だ。どっからどう見てもマジだ。
これってもしや…もしやもしやの異世界召喚？！

マジか！必死こいて終わらせたレポートがちよい勿体ない気がしなくもないけどトリップじゃん！やった！！

しかも王道で勇者ネタか！あ、でも女神って言われた？言われたよね？私は美人よりは可愛いと言われる容姿だ。それなりにモテるくらいには整ってるが「喋ると残念な子」という悲しいレッテルを貼られている。だがここにそれを知る人間はいない。そう、この貴重な体験ものにすべし！

なので女神っぽく畏まってみる事にした。鍋蓋とルーはご愛敬。高校時代のジャージ姿である事も気にしない。気にしたら負けだ。だって楽だもん。部屋着にいちいち洒落つけ求めんな。

「私を呼んだのは、あなた？」

「いえ、女神。私は言伝てを賜った代表に過ぎません。正しくはこの国の王で在らせられるラビスラルⅡルファーナ陛下が望まれたのです。儀式を行ったのは、こちらの神官、アスナⅡリヒルです」

ほうほう、国王が呼んで神官が実行したと。正に王道。

神官、と言われた男も膝まずいていた一人で名前を呼ばれた時点で

顔を上げた。銀色の髪にまたひと束メッシュを入れている。赤だ。見つめてくる瞳の色は同じ赤。もしかしてこのメッシュ、目と合わせてるのかなあ？

しかし神官さん、普通柔和な表情してそうなのに目付き悪い。ニコリともせず凝視する姿は神官というより魔王のようだ。またそれが魅力だけでも。絶対ツンデレだこの人。

隣の騎士さんは視線は強いけどキツさは感じないんだけどなあ…美形だし。

ところで呼んだ本人こと国王陛下はどこ？

言伝てって言ったから来られない理由でもあったのか…まあいいや。そのうち会うこともあるでしょ。送還されない限りは。

とと、本題本題。さあて、国の危機とは何だろうな。戦争とかは血生臭いから勘弁願いたい。チートな能力なしに前線出されたら瞬殺だよ。

「私を何故呼んだか理由を聞いてもいいかしら？」

なるべく優しくに見えるように首を傾げながら微笑んでみた。効果があったかは分からないが、青メッシュのイケメン兄ちゃんが目を輝かせた。か、可愛いじゃねえか。

「是非、カレーを作って欲しいのです！」

………… あつれ、おかしいな。幻聴が聞こえたよ？

カレーカレー… 思い付くのは手に持ったカレーのルーのパッケージにある茶色の物体。お子様から大人まで愛される栄養満点スパイシーご飯。

まさかね。国をかけての召喚で庶民の味方であるカレーを作ってくれってそんなバカな事…。

「我が国の危機を救ってください。女神の作れるカレーで！」

…幻聴じゃねえ!!

いやまて、もしかしたらこの世界では『カレー』ってものが違うかもしれない。でも作れって…いいや、聞いてみよう。

「カレー…確かに私の世界には存在します。しかし、あなたが望むようなものではないのですが…」

「やはりカレーをご存知なのですね!」

おおい、遮るなよ。

「カレーという料理を知る女神。あなたを我が国一同、歓迎致します」

……………、

マジだ!

女神と呼ばれた日（後書き）

ギャグ寄りで王道から斜め横走っていきます。
どうぞよろしくお願いします。

城の中での攻防

ファンタジーにうきうきで召喚されたらカレー作ってくれて頼まれた。何だこの展開。

カレーが国を救うの？救っちゃうの？！

女神と呼ばれたテンションが下がる。というか無理だ。続けられない女神ポジション。

カレー作るくらいはまあ…いいけど。折角の異世界だ。楽しみたい。

「別にカレー作るくらい構わないけど…」

「！ありがとうございます！！！」

私が了承の言葉を出せば青メツシュの兄ちゃんは喜び場が湧いた。今まで姿勢を正していた人達が一斉に立ち上がり歓声を上げる。

いきなりの事に思わずビビった私に気付いた青メツシュの兄ちゃん

が横に並び庇うような体勢を取る。おお、背が高い！私、彼の胸元に顔があるよ！

「申し訳ありません。皆、女神の慈悲に感激しているのです」

「はあ…あ、一言。残念な事言うようだけど、私は女神じゃないよ？確かに別世界の人間だしカレーの作り方知ってるけどそんな神々しいものじゃないから」

女神呼びも何やら悲しくなってきたので注意すれば、彼は目をパチパチとさせた。

周りは興奮状態の為聞こえていない。

「そう…なのですか？カレーは神々が口にするものと聞いたものですから…」

「私の世界じゃ一般的な食べ物だし。夢破っちゃって申し訳ないけど、おんなじ人間だよ。私は水樹 花。あ、こっちの世界だと逆かな？ハナミズキです。…このネタで何度からかわれたか…まあいいか。おにーさんは？」

そついや他人は紹介されたけとお兄さんの名前は聞いてないよ。

礼儀として名乗った私に対して一瞬戸惑いの表情を浮かべた彼はにこやかに微笑んだ。

「俺の名前はラスナグ」シャルフと言います。よろしく願いします、ハナ様」

「人間同士様なんてつけなくていいのに…じゃあカレー作ったら私世界戻っちゃうの？暫く観光とかしていい？」

「観光ですか？こちらの都合で呼び出しておいてなんですが…元の世界へ戻らなくていいのですか？」

「元の世界に早いとこ帰らないと帰れなくなる規制とかあるの？」

それならもうちょっと考えるけど。

「いえ…ただ、召喚の儀には色々条件を揃えなければならないので、早くてもひと月はこの世界に滞在して頂きたいと思っております」

「成程。ならいいんじゃない？」

どうやら月1で決まるらしい。向こうの世界の影響とかも頭よぎっ

たけど、行方不明とかの扱いにはならないだろう。
なんせうちの両親は娘が半年連絡取らなくても気にしない人達だし、
大学も無断で1ヶ月休んだ事もあるしね。またかと思われるくらい
か。単位が少し不安だけだな！

「…面白い方ですね」

クスリと彼が笑う。優しい顔をした人が自然な笑みを浮かべる程綺
麗なものはない。

いい兄ちゃんだ、目の保養と思っていた所で腕を引かれた。後ろに
引かれたものだから、誰かと振り向けば先程紹介された目が鋭いア
スナリヒル…赤メツシユの兄ちゃんだった。

「こいつが女神だろうとただの異世界人だろうとどうでもいい。客
人として扱えばいいだろう。カレーについて色々話さねばならん。
周りが勝手に盛り上がっているうちに陛下の元へ連れていくぞ。煩
くて叶わん」

「そうだな…この興奮状態だとハナ様も危険か。では案内します」

客人扱い、というわりには乱暴な仕草で腕を引かれる。おお、なんというか王道な！嫌われパターンか？最後にはデレるパターンだな。確か…アスナだっけ。先頭をラスナグ、次にアスナ、そしてアスナに引きずられるようにして私が広間から退出していく。おお、廊下も豪華だ。

「ここってお城なの？」

「城以外に何に見える」

おや。返事がツンだ。アスナの言葉遣いに苦笑いしながらラスナグが説明を追加してくれた。

「ここは城であり我らが王で在らせられるラビスラル陛下のお住まいです。我が国レナーガルは農業を主に国益とした小さな国でして、気候も温かく平和なものです」

「へえ〜。でも、カレー作らないと危険なんでしょ？平和じゃないんじゃない？」

「それを今から説明しに陛下の元へお前を連れているんだろう」

引きずるまま当然のように話される。

召喚したのは確かに公式の場だったけど、見た目普通の人と変わらないし本人も女神説を否定したもんだから胡散臭満載かとは私も思うけど…ツンだとは分かってるけど。

こつもね？人と視線を合わせず自分の都合で動く奴を見るとね？

グツと引きずられるままに歩いていた足を踏ん張る。停止した私と一緒に勿論腕を引っ張っていたアスナも止まった。

「なんだ…」

「天誅っ！」

ドカッ！

そして振り返った彼の頭にジャンピングしてチョップを食らわせた。
背が高いんだよ！

綺麗に入ったものだからグラリと彼は体を揺らす。が、踏みとどまり目付きの悪い目で私を睨み付ける。怖いっ！魔王って絶対こんな顔だよ！そして握られてる腕がギリギリあり得ない音してるんだけど！

「痛いっ！力緩めてよ！てか離せっ！」

「こっちも痛いわ！何なんだ貴様は！」

「煩いっ！あんたがどう考えても悪いでしょーが！女の腕無理に引っ張って事情も知らない奴に悪態ついてこっちを見ようもしない！男として、いや人間として最悪でしょーよ！」

言
っ
て
や
っ
た
ぜ
！

城の中での攻防（後書き）

手が早い主人公。

魔術と精霊と属性

言ってやった方がいいが、魔王の額にピシリと青筋が。
そっぴや彼って召喚した本人なんだっけ？じゃあ魔術とか使いたい
放題？

私は手に持っていたカレー鍋の蓋をサツと構える。
鍋の蓋をナメんなよ！RPGでは防御率高いレアアイテムな事が多
いんだかな！

「……………ツチ」

しかし相手は攻撃してくるでもなく言い返してくるでもなく、舌打
ちだけ溢すと乱暴に腕をほどいた。そしてクツキリと手形がついて
しまっている私の腕を見ると顔をしかめる。

「…それは悪かった」

……へえ。

悪いと思った事はすぐ認めるようだ。ただのツンデレではないらしい。よしよし、許してやろう。

寛大な気持ちで頷きながら鍋の蓋を下げる。と、脳天にドゲムツと衝撃が走った。

痛みはそこまでないが舌を噛みそうになったぞ！

見れば眉間に皺を寄せたアスナが私にチョップをした体勢で言っただけのけた。

「悪かったが、口で言えばいいものを攻撃するな」

「あんただって今攻撃したじゃん！」

「私のは反撃だ」

屁理屈！

チョップは私、異世界人の特権だろうよ。何で反撃されるんだ。頭を押さえて唸り声を上げるとラスナグが間に入ってきた。どうやら收拾をつけるらしい。

「ハナ様。相手に注意なさるのはいいですが、手を出してはなりません。危険です」

「う」

「アスナも。反撃とはいえ女性に手を上げるのはよくない」

「む」

そうだよ。ツンデレさんなんだからほだしていけばいいんだよね。そうすれば今回の事だって後日反省するはず。今に見てる！互いに顔を背ければラスナグが大きくため息を着いた。が、何やら少しだけ目が面白そうだと語っている。

「ラスナグ？」

「ああ、すいません。大抵の方はアスナの目線が怖いとかで正面切って喧嘩を売る事は無かったんですが…」

私が見事やってのけたぞ。

まあ…でも王様の臣下である人に向かって啖呵される人間はいないだろう。私だってここが異世界じゃなきゃ我慢するし。そういえば名前は聞いたけど二人の職業とか聞いてないや。

「二人はお城に住んでるの？」

「ええ。俺は騎士団第二隊長で城の園内にある隊員寮の一室で住まいわせて頂いてます。アスナは王族専門の魔術師ですので、城の一室に」

「やつぱ位は高いんだねえ」

陛下に案内するなんて庶民は無理か。

「そういえば…さつきから陛下の名前結構上がってるけど、何で召喚した場所にいなかったの？あそこで話した方が早いと思うけど」

二度手間でしょ？と問いかければなんとも言えない空気が流れた。
あれ？

「…これと言ったらハナ様は憤慨するかもしれませんが…」

「ん？」

「召喚術、というのは高度な魔術でして、呼び出すものを精密に理解して召喚するんです。ですから、今回未知のものを呼び出すのは初めての事だったので陛下は別室にお待たせしました」

「呼び出すのを『カレーを知る言葉を話すもの』とだけ設定したからな。何が呼び出されるか分からなかった。一応神々の食べ物だと言われていたから出てきたものがどんなものであっても敬意を払うよう心掛けたが」

え。

「じゃあ私容姿や雰囲気は神々しいとかじゃなくとりあえず怒らせないようにしとこうぜ的な女神呼びだったの？！」

「私異世界人だけど人間だし！女神って呼ばれるような容姿でもないし力もないけど得体の知れないものじゃないよ！」

「面白く、可愛い方ですね」

「騒がしく乱雑な女だ」

ラスナグ微妙だよその評価。珍妙とも聞こえるよ。そしてアスナ、ツンデレとはいえ腹立つな。

しかし危険ではないと認識されてるのは有り難かった。剣突きつけられたり魔術でぶっぱなされたりはしたくないしね。なのであえて評価に反論せず全く違う事を聞いてみた。

「召喚術といい魔術師といい神官といい、この世界には魔術があるんだよね？」

「そうですね。ハナ様の世界にはないんですか？」

「ないねえ。歩きがてら教えてくれる？」

「いいですよ。でも俺が答えるより専門であるアスナが話した方が分かりやすいかと…」

「…話せばいいんだろう、話せば」

ラスナグの困った目線に仕方ないというようにアスナが説明を始めた。意外だ。

「この世界には精霊が存在する。火、水、風、土が主だが、細かく分ければ数百とあるだろう。だが人が操れる、契約出来るのはこの四種類だけだ。私達はこの世に生まれた瞬間精霊の加護を受ける。それにより火は赤、水は青、風は緑、土は茶と瞳の色が変化する」

「俺は水の精霊で青、アスナは火の精霊なので赤です。魔力の強さは個人で違うので、強ければ強い程瞳の色に深みが増します。そしてパツと見て何の精霊の守護を得ているか分かるように、この大陸では髪の一部を染めるんです」

目とメツシユの色が同じなのには理由があつたのね。確かに他の人もメツシユあつたなあ…精霊の加護とかカッコいい。私の目は黒から変化してないらしいので加護はない。残念。

「じゃあ魔術は、その属性のものしか使えないの？」

「そうですね。他の属性の魔術は精霊が嫌がりますので、使えたとしても本来の十分の一程しか威力はないでしょう」

「へーそうになるとちょっと不便だね」

「近頃は属性を纏った魔術用具も増えた。他属性の他人を呼び大掛かりな魔術を行う機会など滅多にない。不便という程もないが…確かに召喚術は大魔術。王の許可を貰い数人ほどの属性別魔術師や神官が必要となる」

「え？アスナが私を召喚したんじゃないの？」

「大本は私だが、他もいる。私の後ろで膝まずいていた奴等も国に属する魔術師や神官だ」

ほうほう。

あれ？でも生まれつき精霊がつかなら全員魔術師なのか？でも魔力の強さに違いがあるって言ってたから極めた人だけ魔術師？？でも神官もって話だし…うーん今一この世界の常識が分からないなあ…。

もう少し質問してみたかったが、通路が終わりを告げご立派な扉の前で立ち止まった。どうやら目的地に到着らしい。

ラスナグがゆっくりと扉を開けた。

魔術と精霊と属性（後書き）

魔術の話。分かりにくかったらすいません…。

国とカレーの重要性

「ようこそこの国へ喚ばれてくれました、異世界の方。私はこの国の王、ラビスラルルファーナと言います」

ゆったりと大きな椅子に腰掛けているのは、人の良さそうなおば様だった。

着ている服が特殊であって豪華。私を連れてきた二人が膝まずいて頭を下げた事からこの人が陛下で間違いないだろう。

女王陛下だったのか。なんというか…女の人だったら「女王様とお呼び！」的な高慢な美女を想像するけど、柔和な笑みが似合うおば様…お婆様になったら縁側の似合いそうな人。緑の瞳と緑のメッシュ。どうやら風属性らしい。

しかしお婆様か…意外なパターンだ。

とりあえず挨拶をされたのなら返さなければ。正式な礼なんて分からないけど、異世界人って理解されているならいいだろうと頭をペコリと下げた。

「初めまして。呼ばれて飛び出た異世界人のハナ」ミズキです。よろしく願います、女王陛下」

「よろしく願います、ハナ。こちらの都合で呼び出したにも関わらず協力的な様子、感謝します。観光も是非、していつてほしいわ。我が国は豊かな農地の多い国だから」

あれ。観光の話は陛下にどうやって耳に入っただ？

驚きの表情が出たのだらう。陛下はイタズラが成功したかのようにクスリと笑う。

「私、耳はいいのよ？」

良いにも程があるだろ。
ため息が横から落ちてきた。見ればアスナが呆れた様子でいつの間にか立ち上がっている。

「風の精霊の力を借りただけだらう。陛下は王族とだけあって魔力は強い。そのくらい朝飯前だ」

「盗聴が？」

いいのか女王。

真面目くさった王様よりは茶目つ気ある方が私としても付き合いやすいけど……ああそつだ。目的を忘れちゃならん。

「あの……カレーを作らないといけない理由を聞いても構いませんか？」

そう。おかしいな展開を説明してほしい。

何で魔術もある世界で、カレーが世界を救う事になるのか。

若干大規模になってる気がするが気分の問題。私の質問に陛下は困ったような笑みを浮かべるとソファアに座る事を勧めてきた。長話かな。

遠慮なくふんわりとしたソファアに腰掛けると正面にいる陛下の横にアスナが寄り添うように立ち、私の横にはラスナグが立った。落ち着かないが、先に話を進めた方が無難だろう。

陛下へ視線を送れば、小さく頷くと彼女は話始めた。

「そうね、まずは説明しないといけないわね。この世界には六つの国が存在するの。その中の一つがこの国レナーガル。国土は一番小さいけれど、気候もよく恵まれた土地。誰もが好いて、争いのない国…私が目指している姿よ。けれど…」

ゆらりと彼女の目が揺れる。何だろう、戦争でも起きたんだろうかと、りあえず真剣に話を聞こうと言葉を挟まず待っていると、意を決したように女王は続きを言い始めた。

「隣国であるトストン。我が国とそう変わらない領土を持つ次に小さな国よ。織物を主流とした牧場の多いのかな国、であるはずなのに…あの王は…」

ワナワナと震える手は怒りによるものか。柔和だった女王の顔が赤く染まり目に鋭さが増す。

私は緊張して背筋を伸ばした。あれだ、怒り狂う前のうちの母親ソックリだから。

「我が国を配下にしようとしている！無茶な要求をし、領土を広めよう…」ああ、なんておぞましい！」

「陛下…」

震える女王を労るようにアスナが声をかける。鋭い瞳は些か陰を無くし穏やかだ。

やっぱ王は敬愛されてるんだなあ。

隣国と上手くいってないのか。領土争いとはなかなか大変そうな問題だ。戦争、とまではいってなさそうだけど…時間の問題か？うん、と難しい顔をして理解するように頷いてみせると落ち着きを取り戻すかのように瞬時に彼女の顔に笑みが戻った。貫禄ものだ。

「そこで、カレーの出番となったの」

……………何で？

「え、あの、申し訳ないんですけど話が飛び過ぎて…」

「カレーを向こうの王に献上さえすれば、もうこの国に干渉しないと契約したんですよ」

女王の説明を引き継ぐようにしてラスナグが付け加えてくれたわけだが…ごめん、理解出来ない。

カレーくれたら大人しくしてるよって隣の王様どんなだよ。あ…でもこの世界じゃカレーは神様の食べ物なんだっけ。

価値あるものを差し出させるのは取引の基本ではあるけど納得出来ない。お金で解決の方がまだ納得出来る。それとも…用意出来るはずがないとたかをくくっているのか。

「…カレーは神様の食べ物だって聞きました。材料や作り方を私に聞くところを見れば…どんな食べ物かも知らないんですよ？なら判断基準がないんじゃないですか？」

つまり、これがカレーでつす。って物珍しい料理を適当に渡しても問題ないんじゃないかって思うんだ。

私と呼ばれた意味がなくなるわけだが、疑問に思ったので問いかけてみた。女王は「向こうにカレーについて書かれた文献が存在する

の」と答えてくる。向こうは知ってるんだ？

「…もう一つ。私の知ってるカレーと、この世界のカレーに違いはないんですか？」

作り終わってからカレーじゃないなんて否定されても困る。日本式のカレーライスしか無理だけどね。ナンの作り方なんぞ料理ベタな私には難解すぎる。

しかし今度の問いかけには不思議な答えが返ってきた。

「貴女の言う【カレー】は、辛いかしら？」

…？

甘口、中辛、辛口と大まかに言えば分けられる。でもカレーと一口で言うのなら…

「まあ…辛いですね」

一般的にそう言える。

私の言葉に満足そうに彼女は頷くと…

「では、そのカレーは同じものだわ」

自信満々に言つてのけた。

首を傾げるしかない私は、この後言葉の意味を理解する事になる。

強烈なほどに。

国とカレーの重要性（後書き）

女王陛下はお茶目な方です。

剣と治癒と王道展開

暫く滞在するという事でお城の部屋を一室貸して貰える事になった。夕食を一緒にとるという約束を陛下と交わした後、ラスナグに案内されその部屋へと来たわけだが…

「…ここは王道なわけか…」

広々とした室内に趣味のいい装飾。ベッドなんて何人寝れんだという程の大きさに目眩がする。

私の部屋が物置小屋に見える…流石お城。

椅子だってなんか高級ですーっという雰囲気漂っている。これ、壊したら弁償だろうか…。

「気に入りませんか？」

椅子を睨み付けていた私にラスナグが申し訳なさそうに言ってきた。気に入らないというか扱いが凄すぎて…こっちが申し訳ない。じゃ

ージ装備だしな！

王道トリップは嬉しいけど、なんというかむず痒い。

「気に入らないわけじゃないけど…私の部屋より随分広いから戸惑っちゃってね。ラスナグの部屋もこのくらい？」

「俺の部屋ですか？貴族の部屋とは違いますからね。もう少し小さいです」

貴族の部屋なんだー…へえー…。

一応女神宣言は生きているって事なのか。カレーが重要視されているのか。何だか壮大だなあ。

とりあえず作って観光しよう。国同士の争いは言っちゃ悪いが興味ない。

料理じゃなくてファンタジーが見たい。魔術とか魔術とか魔術とか…ああ、夕食まで時間あるからラスナグに色々聞いてみようか。

「ラスナグは水の魔術が使えるんだよね？」

「ええ、水の精霊の加護を受けていますから」

「使ってみて！」

「…え？」

嬉々として言ってみれば、予想外の事を言われたとばかりにラスナグの目が見開かれる。そしてすぐに困ったような笑みを向けられた。

「俺、魔術はあまり得意じゃないですよ。そんなに魔力もないので精霊も小さいですし…騎士になれたのは親譲りの剣術バ力なだけで」

「ああ、隊長さんだったもんね。代々騎士とか美味しい…じゃあじやあ剣舞とかは出来ない？」

「俺の剣は実践向きですから舞いのように人に見せられるものじゃないですよ」

やつぱり困ったように答えられる。ラスナグは顔もいいし体も細身だけど鍛えられてるから舞ってくれたら綺麗だと思っただけだな。実践向きなら稽古とかしてる所覗けば見れるだろうか。よし、観光名所に騎士団本部とインプットしておこう。

「んー…じゃあ剣を見せてくれない？私の世界じゃ剣は珍しくて」

「剣が珍しい…？ではハナ様の世界は魔術が盛んなんですか？」

「魔術、なんて摩訶不思議なもんもないねえ。戦いに必要なのは我慢と根性だよ」

ふふ、それが無ければ何度教授の頭を禿げ山にしてやろうと思ったか…。

三日でレポート十二枚って何。ふざけてんのか。言いたい事を我慢して根性で仕上げてやったら「本当に出来たのか?!」だとお？出来ないと思う期間を告げるんじゃないかねーっ！と一ヶ月休講したのはこの時だけ。

必要なのは諦めと世間わたりかな。うん、母が言ってた事がよく分かる。

「…そうですね。ハナ様の言う通りです。力ではなく、大切なのは努力ですよ」

「うん？」

「どうぞ。俺なんかの剣でよければ」

何かトリップしてる間にいい顔になったラスナグに剣を差し出され
思わず受け取る。

物凄く勘違いをされたっばいけど…って、

「重っ！！」

片手で簡単に鞘ごと渡してくれたものだから軽いと思ってた。両刃
で太めの剣だし一応両手で持とうとしたけど重量に負けた。一気に
腕が持っていかれる！

持てないほどじゃない…けどこんなの振り回せるわけないでしょ
うよ？！

「女性には少々重いかもしれません。先に言っておくべきでしたね
…すいません」

「いやこれ日本人男性で振り回せるのってハンマー投げの選手く
らいじゃないかな…？あと謝らなくていいよ。私が貸してって言っ
たんだし」

申し訳なさそうに剣を引き取ろうとする彼を交わす。まてまて、ま
だ鞘から出してもいないのに。

日本刀でさえ実物で見たことない私にとっては人生初の長物刃物。
鼻息荒く慎重に鞘から剣を抜く。

「わ、あ…」

綺麗だった。

多分、丁寧に手入れをしているんだろう。曇りない刃は私の顔をハッキリと映していて、真っ直ぐ伸びたフィルムは感動ものだ。

飾りの少ない剣だけど、柄の上の所に紋章みたいなのが彫ってあった。太陽みたいなカタチのもの。この国の紋章かな？格好いい。

しきりに感動してクルクルと刃を回していると、ハラハラとこちらを見ているラスナグに気付く。なんだい、大事な剣を汚したりしないで。

一通り見て満足したので鞘に戻そうとした時、ついつい…というか、やってしまったというか…。

ザクッ

「あ」

「っ！」

大変切れ味も良好です。

見事重さによって上手く鞘に収まらなかった刃が手の甲を傷付けてしまった。

みるみるうちに血が浮き上がってきて垂れそうになる。カーペットが汚れると思って慌てて押さえる。痛みはあんまりない。熱いけど。

すると勢いよく傷を負っている方の腕を捕まれ引寄せられた。咄嗟に剣を離れた為、床にガランと落ちる。ちょ、今ザックリコースだったよ?!死ぬ気かラスナグ!

危ないだろうと相手を睨み付けければ、丁度私の手が彼の口元へと運ばれた所で。

え。

「ちょ、まつ……！」

「水の精霊よ。我に力を貸し与えたまえ……」

フワリと、彼の口から放たれた言葉に光が集まる。

近くにあった私の手の甲へと光が移る。正しくは傷口に。

熱と痛みが薄れていく。ゆっくりと、傷が消えていく。

これ、魔術だ。

「魔術は苦手じゃなかったの？」

「水の加護を受けた者は唯一癒しの魔術を行えるんです。ですので、魔力が低くても最小限の傷が治せる程度には教わるようにこの国では定められているんです」

へえー成程。

完全に塞がった傷口に感心していると、少しだけ怒ったような顔になりラスナグが私の手を強く掴む。
痛いです。

「軽度でしたので俺でも治せましたが…いくら刃物を持つ習慣はなくとも、危険なものだと分かっていたでしょう」

「う」

「俺も簡単に持たせてしまったので悪かったです…今後一切、遊び半分で刃物は持たないください。いいですね？」

「…はい」

真剣な顔で言っている。本気で心配してくれてるのが分かるので素直に頷いた。

しかし何だ。急に人の手引っ張って口元にやるから王道の傷口なんて舐めて消毒しとけばいいんだぜな展開になるかと思った。この勘違いは恥ずかしい。

いい加減手を離してくれと小さく引き寄せれば簡単に外れた。そして差し出されたハンカチで手に残った血を拭く。これ洗って落ちるんだろうか。

ラスナグは剣を拾い上げ鞘に収めると定位置の腰へと装着させた。

乱暴に扱ってごめん、と小さく言えば大丈夫ですよと笑みを向けられた。もう怒ってもいないらしい。

「そういえば、術をかける前に何か言いかけてませんでしたか？」

「ぶふっ?!」

そこ気付いちやう?!

何でもないと言い張る私を疑う彼。必死に誤魔化している間に時間は過ぎ去り夕食の時間となった。迎えに来てくれたメイドさんっぽい女性に促され、ラスナグと別れ部屋を後にする。

つ、疲れた。剣はもう持つまいと心に誓っておこつ…。

剣と治癒と王道展開（後書き）

まだデレるには早いと思うんです。

異世界の食事情

夕飯と一緒に食べようとは約束したけども…

こんな豪勢だとは聞いてません。

いや、王族と食べるならこんな風なのが一般かもしれないけど。

自分の格好を見下ろし溜め息をつく。真っ白なイブニングドレスは可愛い。可愛いけども…なんか納得いかない。

背中ほどあつた黒髪は見事結い上げられ色々な装飾品をつけられて些か重い。靴もヒールが高くて歩きにくい。私あんまり高いの履いた事がないから慣れてないんだよ。このドレスも胸元と背中が大胆に開いてるし…く、もっと私がモデル体型だったら堂々と行くのに。

太ってはいないけど痩せてもない。つまりは平凡。その平凡な体を先程までガシャガシャと大きな風呂で洗われたのだ。

羞恥心芽生える前に服を剥ぎ取られ数人がかりで湯に入れられ擦りあげられて…まあ、地獄だった。異世界トリップの洗礼ってこんなにキツイものだったのね…。

半場遠い目をしつつ案内してくれたメイドさんが巨大な扉を仰々しく開けてくれた。

先には召喚された時の部屋より多少狭いだけの立派な部屋と、これまた長いテーブル。天井にはオペラ座かと言わんばかりのシャンデリアが飾られている。

……完全に場違いだ。

「ハナ。良かった、よく似合ってるわ」

先に席についていた女王陛下がにこやかに迎えてくれる。どうやらこの服は彼女が選んだものらしい。

可愛いけど私には勿体ないものだ。とりあえず「ありがとうございます」とお礼は言うておく。

座る席に促された所で先程別れたばかりのラスナグの姿。豪華な椅子を引いてもらい腰をかけるとばかりに礼をされる。うっ、むず痒い。

よいせ、と高めの椅子に腰をかけた時目が合った。

「とても可愛いですよ。似合っています」

そう言つて微笑まれた。

…タラシか兄ちゃん！

思わず赤面してしまい視線を逸らす。何だか女王様ニヤニヤしてませんか！

ああ…こんなストレートに言われる事なんて滅多にないもんだから…。

一人悶絶したい状況の中二人しか食べる人がいない晩餐会が緩やかに開始された。どうやらラスナグがいる理由は給仕をしてくれるかららしい。

いいのかな…と思ひながら陛下を見ると、彼女も後ろにいる騎士さんに給仕されていた。茶色のツンツンと逆立った短い髪。その一部が赤く染まっており、瞳も赤だ。アスナと一緒に火属性の人らしい。彼と違って、少し色が薄い。

渋いおじ様タイプのガッチリとした体型の男はまさに体育会系といつてもいい。ラスナグと同じ隊長さんだろうか。年は大分上っぽいけど。

私の視線に気付いた陛下が彼を紹介してくれた。

「彼はティマ＝マルサード。我が国の騎士団団長で、一番隊の隊長を勤めているの。でも最近是我的に従者みたいな事をしてくれてるわ」

ふふ、と上品に笑った陛下。その後ろでティマと呼ばれた団長さんがペコリと私に向かって頭を下げる。下げ返したのは咄嗟に。真顔でお辞儀されたらねえ…。

騎士団は真面目な人が多いようだ。

そんなやり取りをしてる間にまず一品目が運ばれてきた。ラスナグの手で目の前に置かれる。コーンポタージュっぽいスープだ。

「無礼講でいきましょう。今日の料理は我が国で採れたものばかりを使ったフルコースなの。味わってほしいわ」

「はい。いただきますっ」

フワリと立ち上る湯気。香る匂いは食欲をそそるもの。異世界となると食事の心配もあったから、これは嬉しい。

スプーンを持ちスープを掬う。トロトロとした黄色のスープは本当コーンポタージュそっくりだ。味はどうか？

音を立てないよう口に運ぶ。ぱくり、と一口食べて…

「…っおいしい！」

あまりの美味しさに感激した。凄い！これ味もポタージュに似てるけど、それより味も濃厚で甘い！舌触りもよくて…もしかこれ、こっちの世界のが料理法上か？！

「美味しい？良かった。それはトウモロコシのスープなの。私の大好物」

「トウモロコシ…って、あの黄色の粒々のですか？」

「そう！よく知ってるのねえ」

私の世界と一緒にの名前。味もほぼ一緒だし…有難い。カレー作りもスムーズにいきそうだ。材料言って何ソレとかだと大変だし。見た目も味も一緒のが作る身として嬉しい限りだ。

ホクホク顔でスープを全て平らげると空の皿はすぐ退かされ、次の皿が置かれた。可愛い前菜の盛り合わせだ。遠慮なく食べさせて貰う。口に入れるとどれも甘くて美味しい。

「……………」？」

美味しいのだ。

食べきった皿を引かれ、新しい皿が。メインディッシュっぽい肉の切り身が綺麗に並べられている。

パクリと食べる。牛肉と似た味がする。牛がいるなら牛乳もあるかもしれない。

これも、甘くて…美味しい。

若干食事のペースを落としてるうちにパンと、また違う副メインっぽい料理が運ばれてきた。美味しそうな魚のパイ包み。綺麗に盛り付けられ芸術品のようだ。…恐る恐る口へと運ぶ。

とても、美味しい。

……………甘過ぎて。

何でこんなフルコース甘味?! 因みにパンも飲み物も激甘だったよ
大変美味しいけどね!

甘いものは好きだ。でもこんなに続けば胃の方がおかしくなる。塩
辛いものが食べたい…。

完全に食事の手を止めて陛下の方を見つめる。わあ、完食済み。

「えっと…ラスナグ」

「何ですか?」

コッソリと横に立つラスナグに声をかけるとすぐ返事をくれた。
変な質問だったら陛下だと色々まずいかもしいないので彼に聞いて
みる。

「この料理の…フルコースの味付けって、この世界で一般的?」

「勿論です。シェフ達が腕によりをかけて作った素材を生かした料
理ですが…気に入りませんでしたか?」

「美味しいよ。美味しい…んだけど、何で全部甘いのか?」

「？それが普通ですよ」

.....。

カレーの重要性よくわかった！！

異世界の食事情（後書き）

トリップ先は甘い甘い世界でした。

挑発と後悔

グロッキーです。

うう…満腹感より胃が何かおかしい事になってる……。

夕食のデザートはこれでもカーというほど甘い旬の果物のコンポートでした。大変美味しかったです。

この世界はあれだ。女性の敵だ。こんな甘いものばかりでは一気に横幅が広くなる、確実に。

この世界では常識ってことはカロリー消費が半端なく早いって事だ。見た所太い人はいなかったし…なんてうやらしい…。

困った。長期滞在の場所としては最悪だ。美味しいのが更にいけない。

多分食べ続ければ私も慣れてしまう。実際デザートは胃がいつぱいいっぱいなくせして食べきったわけだし。

イヤだー向こうに戻る時にはブクブクの別人になってるなんて！！
食事…ちよつとこれ本気で改善目指さないと…料理得意ではないけど自炊するべきか…。

「食材…そう、食材を見ないと…塩がないわけではないだろうから…」

「ハナ様？」

ブツブツと呟き始めた私を心配そうに見守るラスナグ。食事を終えて今後の話をする予定が顔色の悪い私を見て彼が退出を促してくれたのだ。

それに乗った私を部屋まで再び案内してくれた。現在は私がでつかいベッドの上にダイブした状態なので横に待機中。冷たい水まですていでくれたよ。甘いけど。

騎士の鏡だよラスナグ…。

「無理をして食べたんですか？やっぱり医師の手配を…」

「大丈夫だって、ただの胸焼けなだけだし。ね、ラスナグ。明日厨房を覗きに行きたいんだけどいいかな？調理場とか材料とか確認取りたいんだけど…陛下と今後の話し合いはそれからでもいい？」

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、肉なんて簡単に見つかるだろうし、色々味をみておく必要も出てきた。

素材を生かしたって言うってた…甘かったりしちゃうんだろうか…。

「それは勿論いいですよ。手配しておきます」

「ありがとう」

ようやく復活してきた体を起こして笑顔でお礼を言えば、にっこりと笑みが…返されずに視線を逸らされた。え、何で。

「ラスナグ？」

「…大変言いにくいんですが…その…」

顔が赤い。何で急に赤面なんだろう。逸らした視線と何か関係が…。
嫌な予感がして目線を下げる。そのまま自分の格好へ。

うつ伏せでベッドにダイブしていた私は先程体を起こした。うん、そうだよ。ドレスでしちやいけなかったね。

見事着崩れ、と言ったらいいのか。肩紐がずれて胸元が大きくはだけてしまっている。でも元々このドレスも胸元が開いたタイプだったので、私からすればそこまで変わった気はしない。だらしないけど。

完全ポロリ、とかだったら私も慌てた所だが…このくらいで赤面とは。

それだったらドレス姿で現れた時赤面してほしかった。

…そんなウブな反応されると悪戯心が芽生えますとも。

「もしかして胸元が見えそうだった？」

「っ、分かっているなら早く直してください！」

「平気で部屋に入って来たくせに…ラスナグが直してくれないの？」

ちよつと小首を傾げて相手の顔を覗き込む。

ギョツと赤い顔のまま振り返った彼はまた胸元に目をやってしまったように怯んだ表情を浮かべたが、強く目を閉じると勢いよく上着を脱いだ。

これには私がギョツとする。

「ラスナ…っんぶ?!」

「…後でメイドに直して貰ってください。男の前で、そんな挑発するものじゃない」

そのまま上着はボスソツとやや乱暴に私の頭から上半身に被せられた。デカイ!何も見えん!

そのせいでラスナグがどんな顔をしているのか、後半何を言ったのか聞こえなかった。

モゴモゴと暗闇の中もがいていると、パタンと何かが閉まった音が聞こえた。

それから数秒。ようやく顔を出せた私は一人ポツンと部屋に残されていた。どうやら先程の音はラスナグが出ていったものらしい。

……………や、やり過ぎた?怒らせちゃった??

私の悪い癖はすぐ調子に乗る事。何かと自重すればいいものをついつい乗っかってしまう。

後悔する事もよくあるわけだが…今がそれだ。

悪いこと、しちゃったなあ。ラスナグは私を客人としてちゃんと敬ってくれてたのに、それをからかうような事して。もてるだろくに。私みたいな貧相な女に動揺して…あれ、何かム力ついてきたぞ。

私をスツポリ覆う上着。甲冑は最初の召喚時しか装備してなかった。この上着はこの城での仕事着…軍服みたいなものかな。無くちゃ困るだろくに。

格好いい白地に金の刺繍。似合ってた、なあ。

モヤモヤする。そうだよ、返さないと。それで謝ろう。スッキリする為に必要な工程だ。そうしよう。

また何か言われると困るので服は正しておくか。よいせと胸元を直しているとコンコン、とリズムよく扉が叩かれた。

どちら様？

挑発と後悔（後書き）

主人公の悪癖。ちょっと短めでした。

専属メイドの恐怖

「失礼します。ハナ様、具合はいかがですか？」

入室を促した所、入ってきたのはメイドさん。

着替えやら道案内やらで世話になったメイドさんだ。水色の肩で揃えられた髪は緑のメッシュが入っている。向けてくる瞳の色は深緑。
…魔力強いのかな。

年は私より少し低く見える。穏やかな顔をした可愛らしい少女だ。
…お風呂場では鬼かと思ったけど。

確か名乗られていた記憶がある。えーと、確か…

「フィノアちゃん？」

「はい、ハナ様」

にこやかに返事がきた。そう、フィノアちゃんだ。
なんとなんと私の専属メイド！こりゃまた凄い身分になったもんだ
と思う。

彼女はふと私の持っている上着に目をやって驚いた顔をした。

「まあ、ハナ様。騎士の上掛けなど持っていてどうしたのですか？」

「あ、ラスナグ！」

「シャルフ様のですか？先程ハナ様の着替えを手伝うようにと告げられて自室に戻りましたが…」

う…自室に戻っちゃったんだ…。

部屋で休んでる所に押し掛けるのもなあ。仕方ない、明日多分会えるだろうしその時に謝ろう。…怒りも治まってるかもしれないし。

若干時間任せの考えでいるとフィノアちゃんが背後に回ってきた。
そして背中ของフラスナーを下げる。
え、ちょ…

「ふ、フィノアちゃん？？」

「着替えをされてからお休みください。ゆっくり寛げませんよ？」

「じ、自分で脱げるよ」

「あら。着方も分からなかった人が出来るんですか？さあ…ハナ様は力を抜いてわたくしに全てをお任せになって…ウフフ」

怖いよこの子？！

お風呂場の時異常に体を洗いたがってたけどソツチのケがあったりするの？！

「さあ、ハナ様…」

「いいいいいい！！自分で着替えるっ！！」

ごめんラスナグ！今すぐ謝罪するからフィノアに着替えを手伝わせる指示撤回して！！

寧ろこれ彼に手伝わせた方が安全な気がします？！

お風呂場で裸はもう見られたわけだが怪しい笑みを浮かべる相手に前に着替えたくなんぞない。

あれ、彼女私の専属だよね？毎日これ？こうなっちゃうの？

「ふふ…ハナ様、涙目になっちゃって…カワイイ…」

「ひい！」

だ、誰か助けてー！！

＊
＊

…そんな都合よく誰かが現れてくれる事もなく…

「寝間着も似合っていますよ、ハナ様」

「……………」

すっかり着替えさせられました。

いや、うん…何があったかは敢えて言わないけど嫌がったり逆らったりは止めよう。フィノアちゃんそうしたら変なスイッチ入るみたいだから。

寝間着はネグリジェ。別に透けたり露出が高かったりはしていないけど、リボンやレースが多い。ジャージで慣れていた私にとって乙女趣味じゃなかるうかと悩まされる一品だ。

しかし違うのが着たいと言えば目の前の悪魔にまた笑顔で迫られるだけだろう。

「もうお休みになれますか？」

「寝たい…気もするけど…」

まだ確認したい事がある。

これはフィノアちゃんに聞くべきか…まあ着替えとかじゃなきゃ普通の子だし。

専属にされたからには仲良くならないと。寧ろ慣れないと。

「この世界の文字って、共通語？」

「はい。六カ国全て同じ文字を使用しています」

驚いた事にこの世界、文字が英語だったのだ。

知らない単語もあったけど、特に読めない文はない。文系大学で本当良かった。

なので本からでも充分学べる。知識はあった方がいい。
あとは…

「この世界って、冷蔵庫ある？」

「レイゾウコ…ですか？」

「食べ物を冷えた場所に保管するようなものなんだけど…」

「あ、保冷庫ですね。ございますよ」

あるんだ。

なら有難いと引き出しに仕舞っておいたカレーのルーを取り出した。
常温はちよつと怖い。

「これを置いておいて欲しいんだけど、いいかな？」

「承知致しました」

はい、と渡せば彼女は快く受け取ってくれて部屋を出て行った。

一人になった空間でボンヤリ思う。

ああ、私異世界にいるんだなーって。

テンション高くてあんまり実感がなかった。一月すれば戻れるらしいし楽しむつもりだからいいんだけど、何だか染々感じてしまう。

不思議な感覚。

こうやって、何もかもが違う世界に一人放り出されるとちよつと心細いかもしれない。

「…うーん」

ゴロリとベッドの上に横たわる。見える天井が広くて高くてゴージヤスで。場違いなのがよくわかった。目を閉じれば意識も薄れてくる。何だかんだで疲れていたんだと気付くと、そのまま身を委ねる。

明日から…頑張らないと…。
ラスナグにもちゃんと謝ろう。

そう決意して、落ちた。

専属メイドの恐怖（後書き）

久々更新です。フィノアちゃんは書いてて楽しい。

慣れと謝罪と仲直り

目が覚めたらすっかり朝で。

「おはようございます、ハナ様」

笑顔のフィノアが枕元に立っていた。

「一晩中人の寝顔見てたの?!」

「違います。三時間ほど前からですよ。フフ…ハナ様って寝顔も可愛らしいですね。涎を垂らしながらスヤスヤと…時間を忘れるほどでした」

どこから突っ込むべきだろうか。

…や、もついいや。突っ込んだら負けだと思っておこう。

フィノアちゃ…もうフィノアでいいや。そういう子なんだ、うん。
いそいそと服を脱がし始めた彼女をそのままに話だけ進める。

「今、何時くらい？」

「朝の七時でございます。着替え終えたら朝食をお持ちしますね」

そういえば時間は私の世界と一緒になんだろうか。

聞いてみればちゃんと二十四時間で一時間は六十分だった。英語と
いいこの世界よく似てるなあ。

カレーの話といい、何処かリンクしてる部分があるのかもしれない。

冷たく濡らされたタオルを渡され顔を拭く。彼女が持ってきたのは
着替えはちゃんとお願ひした通りズボンだ。スカートは昨日だけで
充分。

白地に銀色の装飾がされた動きやすいがカッコリとした服だ。ちょ
っとデザインが騎士服と似ている。

「女性ですぐ用意出来るズボンのものが騎士のものしかなくて…本
日はこの服でお過ごしください。後日新調したものをお持ちします」

「いやいや。これでいいよ。デザインも格好いいから気に入ったし。

でも女サイズってことは騎士にも女の人っているの？」

「はい。数は少ないですが、優秀な方が多いです」

へええーやっぱ訓練所とか見に行かないとね。女騎士なんて美味すぎる。

恭しく着せてくれるフィノアは丈などが合ってるか確認した後、満足そうに襟を直して言った。

「とてもお似合いですよ」

…普通のメイドさんだ。
なんかえらく感動した。これで今押し倒したりしてこなければ完璧だったんだけどなあ…。

「今着せてくれたでしょ着せてくれたよね？何でボタンを外すのかな？」

「わたくし、着衣ありの方が好きなんです。チラリズムが最高じゃありませんか」

「なんの話?!」

無理！慣れたら何か終わる絶対！！

何とか押し返そうとしたらシートが手に引っ掛かった。

そのまま引っ張ってしまいバランスが崩れて二人共々床へと転がり落ちる。

「わっ?!」

「きゃ…」

咄嗟にフィノアの頭の下へと手を差し入れる。

凄い性格だが、見た目は華奢な少女。怪我した所なんて見たくない。

そのまま押し潰しそうになったのをもう片方の腕で踏ん張ると、何とか互いに怪我なく済んだ。

「あつぶな…」

「ハナ様…」

ん？

自分の顔のすぐ下には顔を赤くし目を潤ませたフィノアの姿。待て。その反応は間違ってる。

確かにこの体制は私が押し倒したような事になってるけど事故だから！これ他者から見られたら要らぬ誤解を…

「失礼します。朝食をお持ちし…」

…招くかも。

な、何で朝食持ってきたのがラスナグ？！昨日といい今日といい何て展開っ。

目を見開いた彼はハツとしたようにご飯の乗ったワゴンを素早く室内に置くと失礼しましたとばかりに頭を下げてそのまま扉を閉じた。

そして再び二人っきりに。

「いやいやいや！ラスナグ待つて！誤解だ誤解、カムバー！ツク！」

下で悶えながら腕を首に回してくるメイドさんを押し退けドアに走る。

これ以上下手に印象悪くしたら私ホントにラスナグに会えなくなるからね！

勢いよくドアを開ければまだ近くにいた彼の背中をガッツリ掴む。振り向いた相手に私は慌てて言うてのけた。

「いめん…っ」

昨日の謝罪を。

「昨日は本当にごめんなさい。私、調子に乗ると悪ふざけが過ぎるから…不快に感じたと思う。ラスナグが怒るとは思わなくて…っていつもあんな変態発言してるわけじゃないからね?!変態といえば

さっきのは偶然であって誤解だから！メイドさんに手を出すほど飢えてないのっ」

謝罪を…というより言いたい事を一気に話した状態。

最後の方は特に意味不明。飢えてないってどんな理由だ。私そんな肉食なのか？

勢いに負けたのか固まっているラグナスに私もどう続けていいかわからない。とりあえず強く掴んでしまっていた手を放した。

「…ごめんなさい」

自分でも、何に対しての謝罪かわからない。
ふと空気が動く。俯いた頭に大きな手が乗った。それを柔らかく動かされ、撫でられていると知った。

「もう、怒ってませんよ。それに俺も…すいませんでした。あんな風に部屋を出ていくべきじゃなかった」

「っ…」

お…

怒ってなかったー！良かった、なんなピリピリした空気で日々過ごせなんて言われたからにやどうしようかと思ってた。

身長差のせいなのか日本人は童顔と言われるせいなのか、子供をあやすように頭を撫でられる。優しい手付きは何となく父親みたいな暖かみがある。

それがまったくすぐったくて、その手にすりよるように顔を動かす。

「ありがとう」

優しいなあラグナス。

不安部分が解決してご機嫌に笑っていると頭に乗っていた手が止まっている事に気付いた。

あれ、と見上げようとする前に背中に衝撃が襲う。

「ハナ様っ！朝食が冷めてしまいますので部屋にお戻りくださいませっ」

「わわっ」

フィノアの小さな体が背中に抱きついてきたようだ。そのまま回れ右よろしく180度体を回転させられ部屋の方へと歩かされる。慌てて声だけで彼に伝えた。

「ラスナグっ！また後でー！」

それだけ告げて部屋へと戻った。
朝食は一人分しかなかったから、ラスナグやフィノアは誘えない。
今度は早起きして一緒に食べようと誘うでしょう。一人じゃ味気ない。

…相変わらず甘い食事だけどさ。早くも胃もたれでグロッキーになりかけた。

慣れと謝罪と仲直り（後書き）

ラスナグと仲直り。

食材の話

半分以上残してしまった朝食に謝罪しつつも本日は約束していた厨房にお邪魔しております。

スツキリと片付けられコックも一人もおりません。…貸切状態？

「ラスナグ。もしかしくとも私の為に場所取った？」

「ここは予備の厨房なんですよ。流石に城の第一厨房はバタバタしていて見せられませんから」

成程。それなら良かった。

流石に働く人の手を止めてまで見学したいとは思ってない。でもちよつと調理してる人達の様子は覗きたかった。どんだけ砂糖入れるの？

「…まあその問題は置いて、あれだ。コンロってやっぱり魔法を使って火を起こすの？」

「そうですね。必ず各調理場に三人以上火の加護を持つ調理人がいます」

「へええ、省エネだね、羨ましいや。あ、水道はあるんだ」

下水道とかはちゃんとないだもんね。火より水回りがあるほうが有難いか。

一人納得しながら歩く。冷蔵庫っぽいものはあるって昨日フィノアが言ってたからいいとして、後は調理器具と調味料。

調味料はカレー粉があるわけだからあんまり必要ないかもしれないけど、私の食生活の為。自給自足ライフの為に確認しとかないと。

「味噌と醤油なんてものはない、よねえ……」

「ミソとシヨーユ……それは何かの呪文ですか？」

ええ。塩分という強い味方ですとも。
日本文化だから仕方ないか。

「お、油っぱいの発見。塩もあるね。砂糖に砂糖に砂糖……どんなけだよ。胡椒もあるし、うん」

これなら大丈夫かな。

「ハナ様、それは蜂蜜です。油はこっちに」

「そう…蜂蜜常備なのね。想像だけでかえって良かったのかも…。鍋とか包丁とかはあるよね？」

「はい。こちらに」

調理器具は変わらない。普通の鍋と包丁だ。

確認終了とばかりに領けば今度は謁見室に連れてこられた。材料などの事は女王の前でしてほしいとのこと。一流のものを用意してくれるらしい。大規模だなあ。

長い廊下を歩き辿り着いた場所はその私が召喚された大きな部屋。仰々しく扉を開かれれば女王陛下とアスナ。そしてサイドを固める大臣っぽい人の束。な、なんだコリヤ。

「おはよう、ハナ。よく眠れたかしら？」

にこやかに陛下が挨拶してくれてラスナグに促され部屋へと入る。
突き刺さる視線に足が止まりそうになったが、何とか突き進む。
とりあえず正面の調度いい場所で止まって返事をした。

「はい、よく休めました。素敵な部屋をありがとうございます」

「気に入ってくれたのなら何よりだわ」

気に入るというよりビビりましたが。

気付くと隣にいたラスナグの姿がない。と、足元で膝まずいていた。

そうだったー！気軽に挨拶なんか返しちゃったけど私も膝まずくべきだった？！でも一応敬語だしセーフ？セーフでいい？？

注目を浴びる中どうしていいか分からず立ったままでいると陛下は
気に入る様子もなくニコニコと話を続ける。

「それで、ハナがよければ今日からカレー作りに励んで貰いたいの。
神々の作る料理だから、材料も珍しいものかもしれないでしょう？
だから皆の知恵も借りようと思って、今日はこんなに大勢なのよ。
ふふ、女神を一目見てみたいって野次馬気分の人もいるようだけど」

私が戸惑いを浮かべたのを彼女は感じ取ってくれていたみたいだ。成程、知恵を…そして私見たさか。ごめん、女神なんて呼び方されるほど美人とは言い難い。若しくは政治に使えそうだとか企む人間が多いのだろうか？

改めて周りに腰かけているお偉いさんを見ている。誰もが…何だか暖かい目をしているのは気のせいでしょうか？

陛下と同じくらいの年齢層が多い。腹黒い人が多いんじゃないかという勝手な想像をしていたが、何でそんな孫を見るような目で見てくるんだろ。まさか皆私が女神だと信じてるとか？いやでも…ラスナグやアスナだって半信半疑…でもなく異世界人だって思っれてるし。

よく分からないけど、陛下が緊張するなと気を使ってくれたのは分かる。だからこのスタイルで行くことにした。

「分かりました。私でよければご協力させて頂きます」

開き直りで高らかに言ってみせると、おおっというちょっとしたざわめきが起きた。

気にしない、気にしないぞ。

「用意して頂きたいのは五つ。ご飯…お米ですね」

「稲の、ね。それならこの国で栽培しているわ。最高級のを用意しましょう」

お米を作ってるのか。もしかしたら和菓子類もあるかもしれないなあ…塩煎餅とかいいかも。

「次は、ジャガイモ…」

「ジャガイモ?!」

び…っくりした。

いきなり彼女が叫んだものだから喋りを止めてしまった。顔色が真っ白で深く座っていた玉座から半分立ち上がってしまったている。

え、ジャガイモがどうかしたんでしょうか？

女王だけじゃない。周りも驚愕の表情でざわめきを増している。ラスナグでさえ啞然と私を見上げてきた。

「あの、森の守護者と呼ばれる魔物が食材なの…?!」

……ジャガイモ、ですが？

なに、その変な肩書き。魔物ってどういう事だ。
嫌な予感しかない。

今度は静まり返ってしまった空間に私もただ頷くしかなかった。

食材の話（後書き）

次回、ジャガイモ編です。

ジャガイモ探索

現在私、山奥へ魔物退治に来ております。

…本当、何でこんな事に。

「ハナ様、お疲れになりましたか？」

「大丈夫。私田舎育ちだからこのくらい屁でもな…あぐっ」

「…お疲れの様子ですね。すぐ休憩にしましょう」

へばる私を甲斐甲斐しく世話してくれてるのは長い金髪の一部を茶色く染めた美女だ。なんとなんと、女騎士さんですよ！しかもラスナグ率いる二番隊の副隊長！強いんだろぅなあ。

念願の女騎士さんと二人っきりで山の中を歩いているのには、ちゃんとした理由があるんです。

＊
＊

ジャガイモ発言の後、私の言う「ジャガイモ」とこの世界の「ジャガイモ」の姿形が一致した為獵に行く事に決定した。どの部分が必要なのか分からない為私も同伴で。

驚いた事にこの世界のジャガイモは動いて森中を巡り、進路を邪魔する者は返り討ちに合うという恐ろしい魔物らしい。そんな物騒なジャガイモ私も調理したくないんですけど。

代用品と言わずもがな違う食材でどーだと提案したが、それは駄目だとのこと。向こう側の指定料理なのでなるべく基本がいいらしい。

そしてジャガイモ獲り選抜メンバーに選ばれたのは騎士団第二部隊。ラスナグ率いる騎士団だ。

紹介してもらったメンバーには唯一女性騎士がいたわけだが、その

人が副隊長であり、美女であつたわけだ。名前はミア＝ラゴナツテイ。キリリとした男前な性格で、いかにも厳格な騎士さんだが女性らしい気遣いが回る理想の女性。惚れそうだ。

尊敬を込めて敬語で接している。恐縮されたけど何とか許可してもらえた。

女神と呼ばれる立場から隊長であるラスナグとミアさんに囲まれゾロゾロと結構な隊列でお城を出発したわけなんだが…。

初めて城の外に出た私がハイテンションになり寄り道や立ち止まりを起こしてしまい問題のジャガイモがある森に辿り着くまで時間がかかりすぎた。

しかも早くもバテてしまった私を気遣う始末。ふ…しかもよろけて崖から落ちたのをミアさんに助けて貰ったんだよ。魔術でなんとか助かったけど、二人で部隊をはぐれてしまった。現在合流するように歩き積めてます。

「はー…しっかし広いですねえ…」

「我が国の三割が森になっていますから。この森も奥まで行こうとすれば五日ほどかかります」

「…広いですねえ………」

因みに四割が田畑などの農地らしい。この国の人口って…ああでも

小さい国って言ってたな。小さい、の規模がどのくらいか分からないから何とも言えないけど。
痛む足を押さえながら頷いていると、私の座り込んだ岩の前に彼女が座り込んだ。

「私が水の使い手でしたら、足も楽に出来たのでしょうね」

「ああ、治癒術ですか？いいですよ、私が勝手にはしゃいで勝手に痛めたんです。…ミアさんは巻き込まれたわけですから申し訳ないですけど…」

「いやいや、本当申し訳ない。」

「いいえ、と首を振った彼女が「崖から落ちたのも自分の責任」といい始めたので慌てて話を変える事にした。休憩なのにドヨドヨしたくない。」

「ミアさんの瞳は茶色なんですね。土の精霊ってどんな魔法を使っているんですか？」

聞きたかった事でもあるけど。
私の問いかけに驚いた顔をしてみせたけど、ふと表情を崩し話してくれた。

「私は騎士の道を選んだので魔術は極めていませんが、弟がとても強い土の魔術師なんです。彼がよく行う魔術でよければ」

「勿論！」

弟がいるんだ。こんなしつかりしたお姉さんがいるのは羨ましいなあ。

話始めた彼女はとても楽しそうで、弟の事が好きな所が伝わってくる。魔術の話も勿論有り難かったけど、笑顔を見せるミアさんが可愛いのが役得だった。

そんなほのぼの空間で再び森の中を歩き出す。女の子ってお喋りが好きだよな。例に漏れず私も好きなので割りと柔らかくなったミアさんと歩いてる間疲れは軽減された。

「…ん？」

暫くすると足元がフカフカになった。フカフカというか…よく畑の土って耕すとこんな感じになると思う。色が濃くて柔らかくて水分と空気を含んでる。

いい土だ。と感心していたらミアさんが緊張感漂う雰囲気醸し出

していた。

「どうかしたんですか？」

「…土壤が豊かになった場所はジャガイモが通過した跡なのです。ジャガイモは長い蔦を土の中で動かし大地を耕す。そして森の成長を促すように水や光を与えていくのが特徴ですから」

ジャガイモって森の管理人か何かですか？

それってあんまりジャガイモ刈ったら…狩ったら？いけないんじゃないだろうか。でもカレーには必需品だしなあ…量さえ持っていかなければ大丈夫だろう。

後はあれだ。そう強そうな魔物じゃない事を願う。

「あまり私から離れないようお願いします」

「はい。…でも他のみんなは何処でしょうね。そろそろ合流地点なんですよね？」

「まだここまで来ていないか…もしくは既に交戦中の可能性があります」

マジでか。

周りを見渡してみるが地面が柔らかい事以外特に変わった様子はない。来てないだけならいいけど。

「っハナ様！」

「えっ」

急に体を強く押されよろめいた横を素早い何かが通過した。
ギョッとして振り返ればミアさんが再び私を押す。その時確かに見えた。

土の中から鳶のようなものが飛び出してきて、私がいた場所を通過した姿を。

ジャガイモ探索（後書き）

日本のカレーといえばジャガイモは必衰ですよね。

戦闘リミッター

「みっみみみみあさん何かがっ！」

「ジャガイモです！」

あれが？！

あれと言いつつもまだ土から出てきた蔦しか見ていない。
確かにジャガイモって蔦が長いけど…おかしいな。私が今見た蔦らしきものは直径十センチくらいある太さのものだったはず。

「…ひとつ聞きますが、ジャガイモって魔物どのくらいの大きさが一般的なんですか？」

「大体が５フィブ。最大で１０フィブくらいです」

「ごめんなさい。フィブってどのくらい…？」

「ああ、申し訳ありません。ハナ様の腰辺りまでで１フィブになり

ます」

メートルと同じくらいってことか。最大10メートルって何。それって美味しいの？

うん諦めよう。諦めるしかないでしょうこれは。魔物って聞いた時点で本気で拒否するかカレーの材料誤魔化せば良かった！！

ミアさんは律儀に私の問いかけに答えながら剣を油断なく構えてみせる。私は言われていた通り背中にくつついておいた。

平凡かつ平均な私は運動神経が抜群に良いわけでもなく格闘技を習っていたわけでもない。こういう時お荷物だよね。

「ハナ様！！」

そんな事を考えている間にも事態は変わっていく。

土の中にいた蔦が顔を出してきたのだ。先程見た大きい蔦がこれまた何十本も。ひえええええ！

ヤマトノオロチか！と思わず突っ込みたくなる。地面が揺れるのでバランスを崩した瞬間体に巻き付くものがあつた。マズイ、と思った時にはミアさんの叫び声が聞こえていた。

「ぎゃ、~~~~っ!!!」

あの太い蔦が腰に巻きついたのだ。悲鳴を上げようとした所で勢いよく宙へと持ち上げられる。

締め付けられた痛みと急激な浮遊感に声が出ない。

や、ヤバい。これ地面に叩きつけられたら終わりじゃないか？ジャガイモでゲームオーバーとか洒落にならん！
必死にもがけば緩むどころか絞められる。ぐええ、圧死する。誰か助けて！

脳内で助けを呼んだ時だった。ふと圧迫が緩み、体が急速に落下する。

「え」

ワンテンポ遅れて声が出た。間近に迫る地面に目が離せない。

ゲームオーバーですか？

「うぶっ?!」

見開かれた目に飛び込んできたのは白。そして闇。
衝撃に息が一瞬止まったけど、痛みは殆どなかった。

何より地面にはない熱が自身を包み込む。

「…遅れてすいません」

「ラスナグ?!」

驚いた。私を抱き抱えるようにしてヒーローの如く現れたのはラスナグ隊長だった。

抜かれた剣と落ちている薦を見てどうやら切って落としてキャッチという凄技を披露してくれたのだと理解する。た、助かった！

「ありがとラスナグ！死ぬかと、死ぬかとっ！」

「無事で良かったですよ。ジャガイモ発見の連絡を監察部隊から受けて向かえばハナ様達がいたので」

危機一髪ってやつだね！

目立った怪我もない私の姿を確認して自分の背に追いやる。ウネウネと鳶を動かすジャガイモに再びラスナグが向き直った。
…はて。ミアさんは何処へ消えた？

「ハナ様！」

「うわあ？！ビックリした！！」

いきなり目の前に現れたミアさんに壮絶に驚いた。気配ありませんでしたよ？！

「申し訳ありません…私がついていながら危ない目に…隊長もお手を煩わせてしまって」

「あ、大丈夫ですよ。怪我もないですから」

「ハナ様がこう言ってくれてる。ご厚意に甘えておくといい。ミア、君は存分に暴れてこい」

ラスナグに暴れてこいと告げられた瞬間、ミアさんの目が鋭く光った。

暴れてこいつてあんな大きな獲物に一人で行かせるつもりなんだろうか。あと他の隊の人は何処に？

そういつた疑問を口にする前に事は起きた。ウネウネと地面から生えていた数本の蔦が根元からスッパリと切れたのだ。

太い蔦がボトンツと大きな音を立てて転がる。何が起こったのか分からず啞然としていて、すぐ側に立っていたミアさんが「フッフ……」と不気味な声を上げた。

「ミアさ」

「アーハッハッハ！ひれ伏せ愚か者！我が前に立ち塞がるならば今のうちに切り刻んでやろう！なに、地獄など生ぬるい。生きている事を後悔せよ！」

…どなた？

まるで人が変わったように目を爛々と輝かせジャガイモに叫んでいるのは間違いなくミアさんだ。え、えええー？女騎士の凛々しさは何処へやら。暴君みたいになってるんですけど？

説明を求めるようにラスナグを見れば、彼は困ったように苦笑いを浮かべ、

「彼女、戦闘狂なんです。リミッター外れると性格変わります」

なんともそのままな説明を返した。

隊長から戦闘よし、という許可を貰い外れたらしい。実に愉しそうに剣を振り回すミアさんは高笑いをしながらスッパスッパと襲いかかる鳶を切り捨てていく。強い…けど怖い。

ジャガイモもされるがままともいかず反撃を開始する。地響きを立てながら地面から全身を飛び出させた。鳶の大きさからして結構あるとか思ってたけど、やっぱりあるのね。

ジャガイモはバラバラに動かしていた鳶をミアさん一人に絞りこむ。二三本纏めて上下左右に配置しランダム感覚で彼女に襲い掛かる。切り落としてもジャガイモの鳶は減らない。かなり多いな鳶の数。

いつまでも続くように見えた攻防戦。でもミアさんに敵を絞ったかに見えたジャガイモは、しっかり私達も敵と見なしていたようで。

地面から突如生えた蔦が足を掴む。再びの感触に悲鳴を上げるとラ
スナグがすぐ気付いた。

「ハナ様っ！」

助けてくれようとする人に人がすぎるのは当然の摂理だと思っ
ついで

伸ばされた手を必死に掴んだ。

戦闘リミッター（後書き）

ウネウネ戦。ここから更新は不定期とさせて頂きます。すみません、PCから離れる機会が多いので…週一は更新したいです、はい。

汚れより安全第一

「う、ごめんなさいー!」

私は何度もこの世界に来てからラスナグに謝ってる気がする。
土下座同様、私は柔らかな地面に膝をつきながら必死に頭を下げた。

「大丈夫ですよ。近くに他の魔物はいませんし、隊員も帰り道の確保ができ次第此方に駆けつけますから」

ラスナグしかいなかったのは、どうやらジャガイモが帰り道を寸断してしまったらしく隊員達が切り開いてくれているとのこと。
私の事はミアさんに頼んでいるので大丈夫だと思ってたらしいけど、やっぱり心配で単独行動をしていたというわけだ。

そして私が何で必死に謝っているのかというと。

「私がラスナグ引き倒しちゃったから…」

そう。足を薦に掴まれパニックになった私は、助けようとしてくれたラスナグの腕を引っ張りあろうとか薦の溢れる地面に差し出してしまったのだ。

反撃する間もなく私もいた事でラスナグは抵抗せず薦に捕まり…地面に埋められた。首から下はしっかりと土に埋もれている。顔が生えている状態で怪我もなし呼吸も確保出来てるわけだが…。

どうやらジャガイモは魔物としては変わっていて、進行方向に存在する生き物を薦で捕まえ土に埋めるだけらしい。負傷はしないが、実際埋められて三日間誰にも見つけてもらえず衰弱した人も見つかっているとか。何で埋めるんだろう…。

ラスナグが埋められた所でジャガイモは立ち去った。ミアさんは鬼神モードのまま追いかけていつてしまったので私しかない。本当は私が埋められるはずだったんだよね。

「ジャガイモがあんなのと知ってれば私も取りに行こうって時に反対したのに…」

「いえ、ジャガイモは確かに巨大で厄介な魔物ですが滅多に深手を

負うなどの怪我人は出ません。行動範囲も森の中だけなので被害に合うのは少ないですし、森に恵みをもたらします。干渉しない形で今までいましたからね…牛の肉がいると言われるより遙かにいいです。あれの皮膚は鉄より固いし好戦的で手に終えませんので」

はい、ビーフカレーは除外しましたー。

良かった肉類言わなくて！私はひとまず早急にこの世界の常識を学ばないといけない。じゃないと心臓いくらあっても足りないわ。食材関係の書物とか一般常識とかそういった類いの本をフィノアに用意してもらおうそうしよう。

とりあえずラスナグの発掘…もとい救出が最優先。触れている地面はジャガイモが耕していったせいか柔らかい。道具がなくとも簡単に手で掘る事が出来る。よいせ、と腕捲りするとザクザク土を掘る。白を基調とした服だから汚れが目立つのだ。まあ土下座した時点でズボンが泥々なわけだが。

うん、洗う人が大変なのは分かるけど仕方ない。洗えって言われれば私が手洗いしよう。この服は気に入ってるし。掘るぞーと気合いを入れた時、ラスナグが何やら戸惑った様子で待ったをかけてきた。

「止めてください、もうすぐミアが戻るか部下の誰かが来ます。そ

の者に掘らせますからっ」

「え。私でも掘れるよこのくらい。大丈夫、変なところ触ったりしないって」

「そうじゃなくて…お召し物が汚れてしまいます」

「今更じゃない？」

捕まってブンブンされた辺りでもうアウトだろう。

ラスナグだって白中心の服で土に埋もれてるっていうのに、変なの。

「何とか洗えば取れるでしょ。あ、ラスナグって残りの染みとか気にするタイプ？白なんだから漂白剤使えば平気だよ…あるかなこの世界…」

「普通、女性は衣装を気にするものでしょう？」

「私何処の貴族なの。確かに綺麗な服は目の保養だし楽しいけど、今服の心配する？大丈夫、ちゃんと助け出すから！」

じゃないと他の魔物が襲ってきたら私にどう対処しろというの。

ラスナグを囚にして逃げる手もあるけど、その後一人になったら困るし。

いや、罔にするって言っても流石に凶悪な魔物に食い殺させたりは
…助けて貰っというてそこまで非情に成りきれまい。
とにかく相応の安全の為に発掘！服は二の次！

止めようとしているラスナグを無視して掘り続ける。

「人が困ってたら、何とかしたいと思うじゃない」

何とか出来る出来ないは別として。私は出来ない事が多そうだ。

黙々と掘続けるとラスナグの腕が自由になるくらい深く掘れた。
掘る事態に力はいらないけど、これが結構重労働。日頃の運動不足
と山歩きの疲れで息絶え絶えで汗だくになる。うおお、匂ってない？

両手の発掘が終了。あと少し、と思った所で彼が両手を地面に当て
力を込めた。引き抜くようにして下半身が自由になる。力業凄いな
…。

ともかくラグナスが無事地面から出られた！これで安全圏になった
わけだと満足げに一人頷いていると彼が早口で唱え始めた。

「水の精霊よ、我に汝の恩恵を与えたまえ」

瞬間、ボコリと空気が泡立つようにして目の前に水が出現した。

私の顔より一回りほど大きな水の塊がフヨフヨと浮いている。おお
っ魔術！

いつ見ても摩訶不思議だとしげしげ水球を眺めていると「これで手の汚れを落としてください」と言われた。成る程、手洗い用か。便利だな。

触れれば割れる事なくひんやりとした水に手が包まれる。暑かった自分としては嬉しい温度。両手で汚れを落とすように擦れば澄んだ水に土が溶けて濁ってくる。

ザラリとした感覚が無くなって手を引き抜けば綺麗に土は取れていた。取れたよーとラスナグに両手を笑って見せれば苦笑いを返される。：若干子供じみた自覚があるので恥ずかしい。

ラスナグもいつの間にか洗ったようで手の汚れはない。その手が私の手を掴む。互いに濡れていて、ヒンヤリとした体温。

引き寄せられるように彼の方へ。

そっと、神聖な儀式のように触れるだけの口付けが手の甲へと落とされた。

「…ありがとうございます」

汚れより安全第一（後書き）

フラグ？が立ちそうです。

恋愛フラグ？

突然の感謝の言葉と行動に見事頭が真っ白になった私は、

「イエイエ、ドウツテコトナイデスよ」

と不思議な片言で返すしかなかった。

な、何だ？今何が起こった？手にチューを…ああ、でもラスナグは騎士だからお礼に手の甲にキスとか常識かもしれない。そうだよ、私が慌てる必要ない。平常心平常心…。

しかし顔は熱いまま。赤くなった自覚もあるので彼に背中を向けた。これ、何か普通にキスされるより恥ずかしいんですけど。

「ハナ様、ミアが戻ってきたようです」

一人照れている間に冷静なラスナグが遠くを見ながら告げてきた。
あまりに普通に言うものだから、やっぱり挨拶みたいなものだったのかと結論付け振り返る。

「ミアさん、おかえ…」

りなさい。と続けられない。

彼女は黙々とこちらへ歩いてきている。背負っているジャガイモの魔物ごと。

意識がないのか死んでいるのか、ただ引きずられている姿は何やら哀愁漂うシュールな図だ。

そして五メートルくらいありそうなのに、軽々と運んでくる彼女が怖い。

「ミア!! ラゴナッティ、無事任務を果たしました」

ラスナグの足元に膝まづき、私の視線に照れた様子で目を反らす彼女。

何処が照れポイントなのか分かりません。

そんな私の混乱を他所に二人は話し合っているとジャガイモを調べる。あ

れ、鳶がまだ動いてない？

「ハナ様。ジャガイモは気を失っているだけなので、カレーにどの部位が必要なのか教えてくれますか？」

「え。生きてるの？」

「森に恵みを与えますので、どの部位によっては放そうかと」

キャッチ&リリースか。

確かに埋められる危険はあるけど命の危機はない魔物だもんね。

納得した様子を見せて私はソレに目を向ける。長い鳶の先にはゴロゴロと目的のものが。うん、一回り大きいけど、私の知ってるジャガイモだ。

味も一緒に確認したいから、少し多めに持って行って別の料理を作ってみるかな。

「この根っこについてる茶色の実みたいなのが欲しいんですよ。大きいから…まあ、十個くらい？」

「…この魔物の卵を？」

……種みたいなものだと思おう。

若干引きつった笑みで頷いてみせればミアさんとラスナグがもぎってくれる。それを持ってきた布に丁寧にくるむと、「帰りましよう」と担いで歩き出した。

私は手ぶらでいいらしい。慣れない山道だから、有り難く持って貰うことにした。

そして隊員が待っているだろう帰路につくとそこには…変な煙が 올라가っていた。

「たいちよ」

「隊長、助けてくださいー」

「うっ、土が目に入って…」

「俺トイレ行きてーよお」

嘆く隊員達は、一人残らず見事地面に埋まっていた。
こりゃよい収穫日になりそうだわ…。

＊
＊

何とか全員掘り出して城に辿り着く。夕日が目に染みるわあ…。

手や顔やら露出している部分はラスナグの魔法で洗わせてもらったけど、衣服は全部泥だらけ。勿論私だけじゃなく全員だ。

ラスナグはやっぱり私が掘り出し作業をするのにいい顔をしなかったけど、無理にやった。いいんだよ、変な達成感あるから。流石に泥だらけの体をどうにかしようという事になり解散。私もフィノアにお願いしてお風呂に入らせて貰おう。

「何ですかこの汚れ具合は?!」

そして部屋に入ったとたん絶叫された。いやぁ…やっぱり酷い？

「ちょっと色々あって。ごめんね、オニユ一の服こんな汚しちゃって」

「それは構いませんが…ああ、ハナ様のお髪もボサボサ…お風呂でしたら用意が来ております。今すぐ入浴してきてください」

「うん、ありがとう」

それは有難い。着替えを取りに行つて参ります、とフィノアが退室している間に汚れた服を脱ぎ纏めておくと浴室へ。無駄にだだっ広い素敵お風呂ですよ。多分学校の教室くらいはあると思う。一人で入浴は初めてだったので嬉しい。

ピンクの濁ったお湯からは薔薇に似たいい香りがする。
私は一通り体の汚れを落とすと湯船に浸かった。

「ふいー…ゴクラクゴクラク」

なんと年寄り臭いセリフを吐くと足を揉む。

絶対明日は筋肉痛だからね。軽度で済むようにしておかないと。

しかし今日は大変だったな。ジャガイモが魔物なのは度肝を抜いたけど…あんなに大きいとは思わなかったし。崖から落ちるわミアさんは性格変わるわラスナグも…なんかアレだったし。

思い出しても恥ずかしい。ドラマとか漫画とかでは見たことあったし、さぞイケメンにされたら幸せだろうとニヤけたりもしていた。実際ニヤけるどころじゃなかったが。

「うーん…」

湯から出した己の手の甲をじっと見てみる。そこまで、私が意識することじゃないとは思っただけ…。

私、もしかしたらラスナグの事好きなんだろうか？

顔も性格も申し分無い有力物件ではある。嫌われては…いないみたいだし。

でも昔付き合っていた男にあんな事されたらドン引きな気がする。顔、顔か。やっぱり顔が原因か。

「美形は得つてことか。いい思いしたって事にしとこう。ラスナグもいちいち意識されちゃ面倒だろうし」

モテるんだろうなー本当、羨ましい限りだ。

そろそろ出るかと浴室を出るとタオルと真新しい下着が置かれていた。

さっさと拭いて下着を身に付けたのはいいが、はてさて肝心の着替えをは何処にあるのだろうか？

「フィノア？」

仕方ないので下着姿の上にタオルを巻いた状態で部屋に出ると笑顔で彼女が迎えてくれた。

あ、嫌な予感。

「さあ、着替えましょう？」

先程とは違い満面の笑みを向けるフィノアに、私は引きつった笑みを返しておいた。

恋愛フラグ？（後書き）

フラグが立っているように立っていない。

読んでくださり、ありがとうございます（深々）

神官長と魔術長

「歓迎会？」

「またもや違うフリルのついた真っ白のミニドレス。レースには黒を使っていて、可愛い。」

「それに合う髪型にフィノアが整える中、何故こんな格好をしないとならないのか教えてもらった。」

「はい。ハナ様がこの世界に来てくださり、尚且カレーまでも作ってください。これを祝わずどうします？」

「そんなもんかなあ……」

「隣国のトストーンからも王や宰相方がいらっしゃいますよ」

「へえー……え？今敵対してる……カレーを指定してきた国じゃないの？」

「女神を一目見たいそうです」

成程。偽物だとイチャモンつけにくるのか。

それはまた面倒な…確かに私は女神じゃない。カレーを作れるだけで不思議な力とかチート能力はないから、イチャモンつけられても正直言い返せないものがある。

これはハツタリ効かせないと不味いだろうか。嘗められるのはごめんだが、かといって必要以上に重要視されるのも面倒だ。女王に丸投げしちゃうかな…。

「…はい、ハナ様。出来上がりましたよ」

「ありがとう」

モヤモヤと悩み始めた所でフィノアが髪をまとめ終えてくれた。

本日は上に一つで縛り上げお団子にした髪型で、サイドはチヨロリと髪を下げたもの。散りばめられているパールのようなキラキラした髪飾りが可愛い。

薄く化粧も施され、準備完了。うん、綺麗にしてもらった。

やっぱり自分でやるには限界もあるから、こうして人にしてもらうと嬉しい。それが自分に似合っているのなら尚更。

「準備は出来たか？」

ノックもなくガチャリと扉が開いた。

確かに準備は整っているが、もし下着姿とかだったらどうするんだ。

文句を言っ てやろうと振り返り口を開きかけ…目が点になった。

「？なんだ」

「い、いや…その…声を聞いた限りじゃアスナかなーって思ったんだけど…」

「私以外に誰がいる」

いや、確かに…アスナだけでも。

前に見た衣装ではなく、真っ黒なローブのようなものを主体にした衣装。しかし地味ではなく、金の刺繍が施され複雑な紋様を描いている。他彼自身髪と揃えたのか、がプラチナっぽい装飾品を頭、首、

腕、足にジャラジャラと着けているが、それがまた黒の衣装に合っていた。

流していた髪も上げていて、気品と色気のようなものを醸し出している。は、反則だろー?!

「あ、悪の王子…」

「は？」

「いやいや、何でもない何でもない。ちょっとした妄想デス」

神官というより悪サイドっぽいよアスナさん。似合ってるから始末に終えない。

魔術師というか…あ、そういえば。

「あのね、私聞きたい事があるんだけど」

「なんだ」

「自己紹介して貰った時、アスナは神官って言われたり魔術師って言われたりバラバラだったよね？どっちが本当？」

「どちらも真実だ。我々神官にとって魔術は必要不可欠なもの。私は元々神官長に就任していたが、魔術長が空席になった為兼任して

いる。魔力が現在この国で強いのは私だけだからな」

うーん？

神官と魔術師なんて、やっぱり正反対に思えるんだけどなあ。

私の世界の常識とこっちの世界の常識とはまた違うのだろう。でも不思議だな、うん。

「神官と魔術は何で必要不可欠なの？魔術長は何で空席なの？」

「時間がない。移動ながら説明してやる」

お。面倒だとはね除けられるかと思っただけど説明してくれるらしい。フィノアに見送られ廊下に出ると二人並んで歩き出す。時間がないのは事実らしく、結構はや歩きだ。

「神官とは名の通り神に遣える職業だ。過去この大陸や世界を作り出した神々は様々な文献を残していった。それを解析し、今この世に読み解き役立たせるのが仕事といえる。文献には神々の力が宿っている事が多い為、魔術を行使しなければ触れる事さえ叶わない。魔力の弱い者は読み解く処が触れるだけで力尽きるだろう」

「はー…そこで魔術が出てくるんだ」

どうやら私の想像する神官とは全く別物らしい。

どちらかと言えば考古学者みたいな職業と言えるだろう。

遺跡とかあるのかなー…楽しそうだから行く機会があれば連れてってもらおう。

「魔術長は国で魔力が一番強い者になるのが主だ。例外もあるが、二年程前に持病を悪化させた前代が席を空けた際に私に押し付けて行っただ。現在魔術長候補を育てながら兼任している。理解出来たか？」

「うん、大体」

つまりアスナは次代が席につくまでの仮代表みたいなものか。うわあ、面倒臭そう。

しかし一番魔力があるって凄いな。確かにアスナの瞳は濃い真紅だけど…まさかダブルトップとは恐るべし。まだ若いのに…若いよね？

「私からも質問がある」

「え？なにになに？」

「ジャガイモがカレーの材料だと告げ、実際持ち帰ったのは魔物の卵。それを城内に持ち込ませるとは何事だ。孵化でもしたらどうする。それに魔物など陛下の口に入れて本当に平気だという保証はあるのか」

それ、質問か？文句に聞こえる。

魔物の卵と称された澱粉は、私にしてみれば大きめのジャガイモくらいにしか思えない。味とかは調理してみないと分からないが、抵抗は少ない。

こっちの世界の人にとっては未知のものではあるから警戒する気持ちは分かる。が、カレーを作れと言ってきたのはそっちだ。いざ作って食べれませんかと言われたら私はキレル自信がある。

「私が試食してから食べさせるから問題ないよ。他にも先に味を確かめたいから何か作るつもりだし…孵化する、のは…寒い所で保管して貰ってるから大丈夫」

芽が生えてくるジャガイモは駄目だし、日の当たらない涼しくも寒い場所、保冷庫の隅に置かして貰っている。芽がウネウネ動き出したら私も流石に嫌だしね。

「陛下に害がないのなら私は文句ない。が、何か起きれば例え異世界人だろうが女神だろうが化け物だろうが覚悟しておくといい」

「化け物ってなんだ化け物って。失礼だなおい」

私の認識ってどんなだよ。

そんなやり取りを繰り返しているうちに辿り着いたのは召喚された時にいた大きなホールの前。左右に騎士の人達がいて、私とアスナを確認すると背筋を伸ばした。

「神官長、兼、魔術長のアスナ」リヒル様、女神ハナ」ミズキ様、ご入場です！」

…いきなりか！

迎えに来たなら迎えに来ただの歓迎会に入るだの言ってよ！

神官長と魔術長（後書き）

他にも大神官などもあります。それは今後で説明を。
読んでくださりありがとうございます！

本当の理由

大きく開かれた扉の先、また以前とは違う空間が広がっていた。

青と赤の服装で纏めている片方、そして白と黒で纏めている片方。真つ赤な絨毯の伸びた先には上座と呼ぶべき王座がある。その絨毯を境に分かれているものだから驚いた。そして全員が…自分に注目している。

こ、こうした場合どうすれば？

女神と呼ばれた異世界人でーす、なんて言える空気じゃない。召喚された時とは違う緊張感に思わず固まると、自分の手がスツと持ち上げられた。

見れば、アスナが私の手を添えるようにしている。そのまま誘導するように歩き出した。従って私も動く。

ゆっくりと二つの団体の境を歩くと王座の前に来た。顔を上げれば、にこやかに迎えてくれる女王陛下と…厳つい顔のおじ様。

…誰？

陛下と同じ豪華な椅子にどっしりと腰かけている。隣同士というより若干向かい合う形で王座に君臨している。視線は強く、目は赤い。白髪混じりの黒髪を撫で上げいかにも威厳のある顔立ち。白と黒を生かした格好いいマントを羽織っている。

陛下と同じ年くらいかな…旦那さん？うーん…でも空気は…悪い。

ふとフィノアの言葉を思い出す。今日行われるのは私の歓迎会で、隣国の王達も…

「ハナ、今回の主役である貴女を皆で待っていたのよ。服も、また似合っているわ」

「ふん。このような小娘が女神であるはずもない。馬鹿馬鹿しい祭りに片腹痛いわ」

にこやかに陛下が言った反対で、おじ様は誰もが私に思うだろう事を言つてのけた。ただその文句は私でなく陛下に向けているようだが。

「笑っているのは今のうち。ハナはカレーを作り出せる。泣きを見るのはそなたの方よ」

「本物を見たことも食した事もない者が強気で余所者に頼むのもおかしい話だろう」

白熱していく二人は周りの存在など気にしないらしい。置いてかれた私はどうしたら…。

どうリアクションしていいか迷っていると、こちらに近付いてくる一人の男がいた。

少し垂れ目がちの目だが光が強い深海の色を持ち、片眼鏡を右目にはめている。焦げ茶色の髪を一つにまとめ後ろに流し、やはり一部青のメッシュが入っていた。

いかにも堅苦しい雰囲気を纏っている。初対面だけど、私を真っ直ぐ見てますね！。

動かずとりあえず待つてみると、隣にいたアスナが動いた。私を庇うように前に立ってみせる。おお？

「ごきげんよう、宰相殿。陛下の元へは今日付き添わなくても良いのですか？」

「ごきげんよう。いえ、主賓に挨拶するのは当然と言えるでしょう？女神様に、是非とも私の名を知って頂きたい」

丁寧な私に話しかけたいというオーラを出している。
宰相？今アスナってば宰相って言った？

発言に気を取られていると彼はアスナを挟んでいるにも関わらず優雅に一礼してみた。

「初めまして、女神様。私はトストン国の宰相を勤めておりますサ
イシャル・ア・マスルルと申します。以後お見知りおきを」

「ご丁寧にも。私はハナと申します」

丁寧にされれば丁寧に返す。

基本でしようと挨拶したのに何故か相手が驚きの表情を浮かべた。

「…言葉を話すんですね」

貴様もか。

なんだって女神呼ばわりするクセに謎生命体反応なんだよ！
憤慨しようとする私をアスナが押さえ込む。この為に前に出たわけ
じゃなかるうな？！

「彼女はそう人と変わりないようですので、会話だけで充分でしょう」

「そのようですね。では私の事も頭の隅に置いて頂くとして、主の事も紹介させてください」

そう言つて男：サイシャル・アは王座の一角へ目を向ける。白熱している口論は止まっていない。寧ろ悪化だ。

「あの彼がトストンの王で在らせられるムルシャルヤイル・ラグヤード陛下です。三十年我が国を支えてくださっている名君となります」

「名君…？」

今、周りを見無視して口論してるのが？

「はい。あれでも名君なんですよ」

この人自分の王様の事アレ呼ばわりしやがった。
腹黒タイプか。見た目穏やかなのになぁ…。

私の残念そうに見る目に彼はニコリと笑みを返すと「カレーの進み具合はいかがですか？」と天気を聞くように気軽に言ってきた。
対決している身として勝手に進行情報を話していいものかとアスナを見れば、軽く頷いてくれた。

「近いうちにお披露目出来るかと」

「本当ですか？それは良かった。両陛下とも認めてしまえば早いでしょうに…勝負などと回りくどい事をされてハナ様にはいい迷惑ですね」

はい？

よく分からない言葉に私は思わず目を瞬いた。サイシャルアも私の反応に目を瞬いてみせる。

「まさか…ご存知ないのですか？」

何が？

え、私何か隠されてんの？カレー作れば戦争回避とかそんな話じゃなかったわけ？

再びアスナに目を向ける。逸らされた。完全こっちが黒かいつ！睨み付けるようにしてサイシャルアを見た。

「説明してください」

人に全て話さず行動させるとはどういった見だ。話次第じゃ寝返るぞ本気で。

とぼっちりで睨み付けられた彼は怯む事なくニコリと笑みをやっぱり浮かべて説明を始めてくれた。

「我が国トストン、そしてこの国レナーガルは、長年争いもなく良好な関係でした。国民も共に穏やかで、日々幸せに暮らしております」

おります？

あれ、現在進行形？

「そして両国に御子が誕生しました。異性同士引かれあつた彼らは将来を誓い合う仲となり、両親らも認めました。しかし流行り病が広まり両陛下は命を落とし、王位継承権を持つ子が受け継ぐしかありませんでした。将来共にある約束は破られ、互いに王になり国を支えていく。そういつた覚悟を決めた…にも関わらず、諦めきれないのでしょね。かれこれ三十年ほど自国に相手を迎え入れようと痴話喧嘩を繰り返しています」

「…カレーの話も、トストン王が我が国を吸収し陛下を嫁がせようとした結果の勝負事だ」

諦めたようにアスナが説明を引き継ぐ。

仰々しい召喚術まで使って私を呼び寄せてカレー作ってくれて…
そんな理由?!

じゃあ何か。私がカレー作ったら女王陛下の勝ちになって向こう側からの求婚は無しでこっち優先ってこと? かれこれ三十年も傍迷惑な痴話喧嘩してきたって?

ふ……………

「ふざけんなーっ!!!!」

色々台無しだろうよ！

本当の理由（後書き）

政はとても双方優秀だそうです。政は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1164v/>

女神と騎士とカレーな世界

2011年11月7日00時20分発行